2026.9.25

大阪女学院中学校・高等学校 2025 年度学校関係者評価

学校関係者評価委員会

日時：　2026 年 9 月 24 日(木) 午後 3 時 30 分～4 時 50 分

場所：　大阪女学院中学校・高等学校　第一会議室

学校関係者評価委員

ヘール会（PTA）会長：山里将之 様

ヘール会（PTA）副会長：道下利佐子 様

ヘール会（PTA）副会長：松木美由紀 様

同窓会会長：稲葉恵子 様

同窓会副会長：竹内　綾 様

学識経験者：有澤慎一 様（日本基督教団池田五月山教会牧師）

陪席

副校長：関口　淳

高等学校教頭：谷本　力

中学校教頭：平松秀元

議事進行

1　議長選出

合議により有澤慎一氏を議長に選出

2　議事

冒頭、副校長より、事業計画と実施概略について説明し、その後「大阪女学院中学校・高等学校　2025 年度自己評価」をもとに各事業項目について質疑応答・意見交換を実施。議事内容は以下の通り。

議事記録

自己評価の【概況】について
（1）2025 年度を振り返って
A　5 日制導入と土曜日の選択型活動

質問：　職員の業務負担は軽減されたか。先生方がいつも忙しい印象がある。
→土曜日が毎週休日となったのは大きい。働き方の改善にも寄与したが、それまでは研修日制度で、各教員に定められた研修日が週日で設定されていたため、教員全員が揃う日がほとんどなかったが、今は月～金で教員が揃っているので、色々な協議や対応がスムーズになって負担は軽減されたと思う。

質問：　それまで 6 日で行なっていた授業を 7 日にしたのだから、授業時間は減ったか？
→中学は確かに減っている。しかし工夫をして、数学と英語については、少し多めの時間設定になっている。高校については、コースにはよるが、それまで土曜日にしていた授業を、7 時間目という形で入れている。

意見：　教員の業務軽減、働き方の改善は、管理者が常に意識して積極的に取り組まれたい。

B　探究活動の充実

質問：　土曜日に担当教員がファシリテーションということだが、休日ではないのか。
→現状としてその担当教員は、休日出勤を頼んでいる。休日出勤手当を支給している。

C　高大接続事業の拡充

質問：　協定校推薦と指定校推薦とはどのようなものか。
→協定校推薦は推薦基準を高等学校が主体的に決めて、高等学校でスクリーニングを実施しているものである。指定校推薦は大学側が、主に成績における推薦基準を指定して推薦者を要請するもので、大学側の基準を満たした生徒から被推薦者を出している。

意見：　キリスト教教育を実践する大学、キリスト教に基づく女子教育を標榜する大学と協定校の締結をする方針は評価できる。特に、長らく関西学院大学、同志社女子大学、神戸女学院大学の 3 大学だけの協定校の状態であったのを、新たに東京女子大学を加えて協定校を増やしたというのは、生徒の進路保証の観点からも英断であった。

D　海外大学との提携拡充

意見：　海外大学専用の進路室の設置や、幅広い地域での多様な大学との MOU の締結は評価できる。MOU を結んでも進学連携ができないと意味がないので、生徒が自身の進学先として安心して志望できる進学連携を確実にしていただきたい。

E　中学生が参加する大学訪問事業

意見：　中学生が、高校を飛び越えて、大学を訪問する企画は、中高一貫教育だからこそできる取り組みで斬新である。中学 3 年の時から、自分のキャリアを意識して大学訪問することの意義は大きい。

F　新任教員支援事業

質問：　メンターはどのような人が務めるのか。

→世代的に近い同性の教員で、可能な限り同じ教科担当の者を校長が選任している。日常的な会話を心がけて接してもらっている。

質問：　メンターに選任された先生は業務がその分過多になるのではないか。

→１単位に相当する増加担当手当を年間で支給している。

（２）生徒募集の状況

質問：　志願者が大きく増加した原因は何か。

→よく分からない部分もあるが、ひとえに広報活動の成果と考えている。過去には関係を醸成できていなかった特定の学習塾や団体との関係構築ができたことが大きい。加えて、何年か前に始めた低学年向けの広報イベントが定着して、幼少期に抱いた好印象が、受験志望につながってきたとも言える。ただ募集については、いわゆる隔年現象というものがあるので、次年度に向けて引き締めて取り組まなければならないと考える。

自己評価の【調査結果】について

Google フォームによるアンケート形式で、生徒、教員、保護者から回答を得た調査結果についての評価は以下の通り。

質問：　概ね評価が大変高いのだが、これが生徒、教員、保護者の実態的な意識と考えてよいか。

→自己評価の中にも明記している通り、全保護者様のほぼ３分の１に相当する回答しか得られなかったため、いわゆるサイレントマジョリティーの部分に踏み込めていない。しかしたとえ３分の１とは言え、これほど高い評価、特に学校への愛着や、娘をこの学校に入れて良かったと思ってくださる方の割合がここまで高いとは思っていなかったので、驚いてい

る。

質問：　他の項目に比べると相対的に評価が落ち着いているものに、空調（82.1%）がある。改善が必要なのではないか。
→寒い、暑いの感覚は、個人によりかなり差があり、適温を教室内で実現することが難しい。また、部屋のどこに設置されているかによって風の当たる位置が変わり、場所による気温の偏りがあって、これらはいずれも解消されていない課題である。
南校舎は、廊下も空調が設置されているが、この夏は暑かったので、玄関の入口を半分だけ閉めることをしてみたが効果があったと思われる。電気代の節約にも寄与したのではないか。

質問：　土曜プログラムについて肯定的に評価した人が、69.4%というのは、他の項目に比べて著しく低いと言えるが、保護者の感覚としては、これは全く当てはまっていると思う。とにかくプログラムの内容の充実度が低く、担当者の当事者意識も低い。ある保護者は、行ってもつまらないと言う娘に対して、行くように促したが、結局はやめてしまったと言っている。また、初年度ということでやむを得ない部分があるとは思うが、履修調査があまりにも遅い上に、その時点で実施されるかどうかも分からない、また内容についても説明が極めて不十分で、興味を引くようなものがあっても、実際の内容とは違うというものが多くあった。２年目は土曜プログラムに参加しないと言う保護者も多い。
→関係者の方の評価を真摯に受け止め、改善に努める。

質問：　生活指導と教職員の対応については、指導困難なことが多いのではないかと推察する。いわゆる、言ってもきかない生徒に対してどのように対応できているか。
→毛染めやパーマは禁止で、例えば毛染めをした生徒については、黒染めする指導を実施している。

質問：　スカートの短い生徒をよく見る。最近は痴漢被害も多いのではないか、短いスカートでは被害に遭いやすい。
→痴漢被害に遭う可能性が高いことを理由としてスカート丈の指導は行わない方針である。痴漢は犯罪であり、悪いのはそれをする人物であって、スカートを短くしている人の方も悪いという発想で指導することはない。スカートに限らず、あらゆる迷惑行為の被害は、生徒に原因を求めることはしない。

質問：　人権・平和教育を実施しづらくなったという面はないか。高校の修学旅行で、辺野古沖転覆事故が発生したが、その事故の影響はないか。
→平和教育へのいわれのないバッシングがあることは理解しているが、本校保護者様の中

にそのような意見を表明される方はいない。中学校の修学旅行は沖縄で、かなり周到な準備をして平和学習を実施しているが、情報ソースは、沖縄県がウェブサイトなどで公にしているものから採用するなどして、特定の意見に偏った情報提供をしないように気をつけている。ただ、平和学習以外の活動として、海洋でのシュノーケリングや、地元の家庭にホームステイをする民泊を実施していて、やはり辺野古沖転覆事故を発想させるのか、小舟で海に行ったり、知らない人の家に泊まったりすることへの不安を述べられた保護者様は一定数いらっしゃった。しかし、小舟も乗客運輸の免許を持つ船舶であること、シュノーケリングについても技術サポートがしっかりできる専門職員がついていること、民泊も全戸が簡易宿泊所の営業許可を得ていることを、旅行業者が説明して理解を得られた。

質問：　ICT と施設について、本校では中学校で全員が ChromeBook を使うことになっているが、iPad の方が学習に向いているのではないか。保護者としては、他の私立学校に通う娘の友だちが、iPad を家で使って、学校にも持っていくのをみて、便利そうだと言う。ChromeBook は持って帰ってきたことがなく、どこで充電しているのか、と思う。
→将来 TOEIC などの外部試験を受験するにしても、高速でのタイピング能力が求められ、キーボードでタイプする経験が必要との観点で、キーボード付きの機種を選定するところから導入が始まった。また iPad は、ChromeBook と比べて学校が管理するには難しい機器だとの認識があった。

質問：　AI との向き合い方はどのように考えているか。
→生徒が AI を使用できる環境になっているので、例えば思考した内容を文章で表現させる課題については、家庭学習として課すことは成立しにくくなっていると考えている。使用に関するガイドラインを策定する予定である。

（３）総括（学校関係者評価委員会によるまとめと分析）
本年度の学校関係者評価では、自己評価書の記載内容およびアンケート調査結果に基づき、教育活動の成果と今後の課題について多角的な意見交換を行った。
まず、高く評価できる点として、週 5 日制の導入に伴う教職員の協働体制の円滑化や、高大接続（協定校の拡充・海外大学との連携）、中高一貫の利点を活かした早期のキャリア教育など、生徒の進路保障と教育の質向上に向けた先進的な取り組みが挙げられる。また、広報活動の工夫により志願者数が増加している点や、アンケートにおいて生徒・保護者から学校への高い愛着と信頼が示されている点は、これまでの教育実践が着実に実を結んでいる証左といえる。
一方で、次年度に向けて改善が求められる課題も明確になった。特に、土曜プログラムについては肯定的な評価が 69.4%にとどまっており、履修調査の時期や事前説明の充実、およびプログラム内容の質の向上が急務である。また、調査の回答率が全保護者の約 3 分の 1 に

とどまっている点を踏まえ、いわゆるサイレントマジョリティーの意向を汲み取る工夫や、教室内の空調環境の偏りへの対策、さらには生成 AI の普及を見据えた学習ガイドラインの策定など、時代の変化と現場のニーズに即応した対応が期待される。
今後も、教職員の働き方改革と教育活動の充実を両立させながら、保護者や地域社会との丁寧な対話を通じて、より信頼される学校づくりを推進されたい。